



かもめ園だより

2017.2 VOL14



メニュー紹介

扉の写真…「昭和62年9月8日

旧山形師範学校卒業生が42年ぶりに常呂町再訪」

この人・この作品…森まゆみ『昭和ジュークボックス』

『抱きしめる東京』『昭和の親に教わったこと』

音の缶詰・CDレビュー…音楽の宝庫、1970年代のポップス

ドゥービー・ブラザーズ

「キャプテン・アンド・ミー」「スタンピード」

「ベスト・オブ・ザ・ドゥービー・ブラザーズ・ライブ」

いちおしコミック…佐々木倫子『おたんこナース』『月館の殺人』

『チャンネルはそのまま!』

■扉の写真

戦争末期の昭和20年春、旧山形師範学校の学生が常呂町の農家9世帯で援農作業に従事しました。写真は、昭和62年9月8日、その卒業生一行が42年ぶりに常呂を再訪し、当時の受け入れ先家族と旧交を温めたときのものです。



こ	の	人	
	こ	の	作 品

森 まゆみ 東京オリンピックが変えてしまったこと

『昭和ジュークボックス』(ちくま文庫)

『昭和の親が教えてくれたこと』(大和書房)

『抱きしめる東京』(講談社)

●森まゆみさんは1954年、東京生まれ。地域雑誌『谷中・根津・千駄木』の創刊・編集から始まり、地域文化、まちづくり、明治時代の文学者や魅力ある女性の生き方などを丹念に調べた著書が多く、子育てや家族を題材にしたエッセイも多数あります。それらの中から、今回は〈昭和の香りがぷんぷん〉の3冊から抜粋して紹介します。



■『昭和ジュークボックス』(2003年、旬報社から単行本で出版。2008年文庫化) ●町の歯科医で写真が趣味だった森さんのお父さんが撮った家族の写真と昭和の時代を飾った曲名がタイトルのエッセイ集。 ●扉のページに「これは昭和30年代、40年代の、歌のある東京アルバム」と書いていますが、まさしくその通り。60代以上の世代は、曲名・写真とともに自然と口ずさめる歌詞と当時の思い出が蘇ってくるのでは? ●一つ挙げると昭和39(1964)年は東京オリンピックの年。「ウナ・セラ・ディ東京」という曲名のエッセイで、ザ・ピーナッツを取り上げ、同じ双子のこまどり姉妹と対比させ、「ザ・ピーナッツの方は都会的でバタ臭く…ほっそりしたかわいい双子」と綴っています。この曲は、この年のレコード大賞作曲賞ですが、森さんは「じ

つをいえば、私はその前年に流行した〈恋のバカンス〉の方が好き…ピーナッツ初のオリジナル曲…これは短調だけれど明るくスクスク育った者たちの青春歌謡である…歌謡曲には子どもが大人の感情を先どりして味わえる、という効用がある」と書いています。 ●今では死語に近い「バタくさい」(西洋的なさま: 広辞苑)が生きていた時代、小学生だった森さんがザ・ピーナッツに感じた洗練さと大人の感覚、何より歌謡曲が暮らしの中に息づいていた世相が伝わってきます。また、東京オリンピックによって、東京が大きく変わった実感を自身のエピソードとして、小学校4年生の森さんが日直で黒板に「今日で佃島の渡し船がさいごです」と板書したことを記しています。そして。ずっと後(『谷根千』創刊後)になり、佃島の住民から話を聞き、渡し船がどれだけ良い乗り物だったのかを知ったことも…。東京オリンピックに関しては、『抱きしめる、東京』(1993年)で、著者が幼児期から小学校時代だった頃の家族、兄弟、町の移り変わり、子どもの遊び、学校の給食、記憶に残っているあれこれを書き留め、「このとき東京は確実に大きく変わった…都市から混沌や闇や川は消え…それは当時〈すばらしいこと〉であり〈正しい整備〉であった」と淡々と書いています。〈地域〉をテーマに取り組んできた森さんらしい文です。



■『昭和の親が教えてくれたこと』(2016年)の〈はじめに〉、「わたしは昭和30年代を、東京の下町と山の手のあわいで育ちました。そのころ父や母…おじいちゃんやおばあちゃん…近所の人たちから聞かされたかすかすの言葉を、還暦を過ぎたいまでも、遠い記憶のなかでふと思い出します…良いことも悪いことも、いま忘れないうちに書いて」と綴っています。〈隣の半分まで掃くんだよ〉〈遠くの親戚より近くの他人〉など、ある年齢の人には通じる教えがいっぱい。 ●昭和の歴史の中で大きく転換点を迎えた〈東京オリンピック〉を体感した年代の人には、変わったことで得たこと、失ったことがしっくりくる言葉やエピソードが、紹介した

本にはあふれています。 ●『昭和ジュークボックス』のエピローグにタイトルの理由と過ぎ去った昭和への思いが綴られ、キラリと輝いています。



音の缶詰 CDレビュー

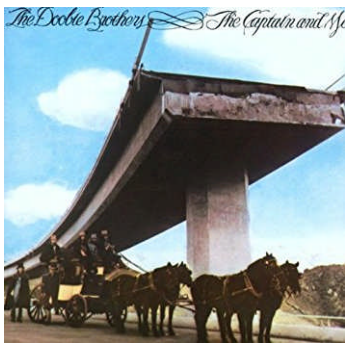
音楽の宝庫、1970年代のポップス

ドゥービー・ブラザーズ

「キャプテン・アンド・ミー」

「スタンピード」「ベスト・オブ・ザ・ドゥービー・ブラザーズ・ライヴ」

前回紹介したイーグルスとともに、アメリカン・ロックの代表格ドゥービー・ブラザーズの初アルバムは1971年。●最初に



紹介する「キャプテン・アンド・ミー」は73年の作品で3枚目。CMのBGMで耳にする「ロング・トレイン・ランニン」「チャイナ・グローヴ」など、ご機嫌なヒット曲を含む11曲収録。ツイン・ギターとツイン・ドラムのパワーあふれる音、耳に残る魅力的&印象的なギターのカッティングとフレーズ、ギター&ボーカルのトム・ジョンストンのソウルフルな声とクリアなコーラス、アメリカ南部の雰囲気をかもし出す曲など、ドラマ性の高いイーグルスに比べるとパワフルなうねりが生み出すリズムがドゥービー・ブラザーズの真骨頂。●このアルバムで彼らの人気は不動のものとなり、4枚目のアルバム「ドゥービー天国」では、ギター&ボーカルのパット・シモンズがリード・ボーカルの「ブラック・ウォーター」が全米1位を獲得します。3本のアコースティック・ギターとアメリカ南部の妖しさをイメージさせる曲調とソウルフルなコーラスはけだるさと不思議な感覚にとらわれます。●「スタンピード」は1975年の5



作目。豪快さと繊細さを兼ね備えた傑作アルバムです。スピード感とうねりはそのままに、ストリングスやホーンセクションを加え、豪華なゲストミュージシャンのサポートを受け、ステージでの再現よりもアルバムとしての完成

度を重視した作品。新加入のジェフ・バクスターの彩あるギター、ビル・ペイン（リトル・フィート）のタイトなピアノ、マリア・マルダーのバックコーラス、どれもが大きく貢献しています。タイトルの「スタンピード」は、馬などが暴走、失踪するさまを意味しますが、1曲目の「スイート・マキシム」から疾走感にあふれた曲がたっぷり。モータウン・サウンドのカヴァー曲「君に抱かれない」は、軽やかさときらめきのあるストリングスやホーンが加わり、新しい魅力を引き出しました。また、「ブラック・ウォーター」につらなる南部の香りあふれる曲もコーラスや緻密なアレンジが活かされ、彼らが持っている多様性を楽しむアルバムになっています。●実質的なリーダーのトム・ジョンストンがアルバム完成後、グループを離れ、以後1982年に解散するまでグループのサウンドは、新加入のマイケル・マクドナルド（元ステューリー・ダン）が中心の都会的なソウル、おとなのロック・バンドに変身。同じバンドとは思えない音に変わります。●「ベスト・オブ・ザ・ドゥービー・ブラザーズ・ライヴ」は、再結成後の96年に発売された「ロッキン・ダウン・ザ・ハイウェイ ザ・ワイルドライフ・コンサート」のダイジェスト版で18曲収録。デビューから解散までの代表的な曲のライブ盤。ライブバンドとしての力量の高さを味わえるアルバムで、トム・ジョンストンとマイケル・マクドナルドがフロントを務める2つのバンドを1枚で楽しめます。●「ヴェリー・ベスト・オブ・ザ・ドゥービー・ブラザーズ」は、92年、ドイツで編集され発売されたベスト盤。ライブ盤との音の違いを楽しめます。●今でも彼らの曲がCMに使われるのは、単なる懐かしさではなく、彼らが生み出す曲が不滅の音だからこそ。ぜひ、若いも若きもどうぞ。

度で再現よりもアルバムとしての完成

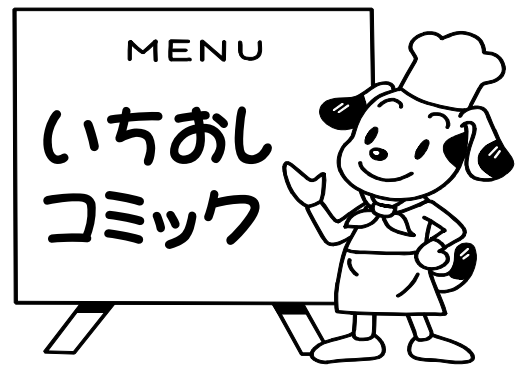
★繰り返し読めるおかしさは唯一無二

佐々木倫子(ささき・のりこ)

『おたんこナース 1-5』(小学館)

『月館の殺人 上・下』(小学館)

『チャンネルはそのまま 1-5』(双葉社)



●佐々木倫子さんは札幌在住のマンガ家。お仕事小説ならぬお仕事マンガに独特のくすぐりを加えたとぼけた味が魅力。主な作品をおさらいすると『動物のおいしゃさん』は獣医、『Heaven』はレストラン、『おたんこナース』は看護師。『チャンネルはそのまま』はテレビ放送局員とピタリとはまります。『月館の殺人』はちょっと違い、「鉄オタク」がメインテーマですが、どの作品も枝葉末節にこだわりつつ、それぞれの主人公が巻き起こすドタバタは、作者の独壇場。また、『チャンネルはそのまま!』もそうですが、北海道ネタの使い方には「道民愛」がぎゅっしり。●『おたんこナース』第1巻は1995年の刊行、最終刊

は98年。医療・看護の基本を原作がきっちり押さえているので、読んでいて安心。当時の医療・看護と現代との違いは気にならず、物語のおもしろさ&価値はそのまま。●新米看護師の似鳥ユキエがさまざまなタイプの患者と出会い、元気が取り柄のユキエがしでかす勘違いや失敗が〈笑い〉につながる基本は変わらずに、患者と向き合い、少しずつ本物の看護師に成長する物語になっています。シリアスな場面や状況も描かれますが、お涙頂戴にはならず、ユキエの中では看護師としてしっかり受け止め、昇華しているところが作者の技。■『月館の殺人』(2006-07)の原作は、推理小説作家の綾辻行人。原作のこまかい設定と佐々木倫子さんの遊び心がピタリはまった作品です。殺人事件なのでたくさん人が死にますが、佐々木倫子さんの手にかかると、それは単なる材料で、本質は「鉄オタク」をめぐる複雑な謎解き物語のくすぐりマンガに変わります。良く考えられ、練られた物語りの仕掛けと用意周到な鉄オタクネタ、そして北海道人には通じる地域がらみのギャグ(としか思えない豊富な鉄知識)。主人公が鉄道がない沖縄、ゆいレールさえも乗ったことがないという女子高生という設定も意外性があり、かつ、物語を成立させる重要な要素になっています。かつてあった、そして作品に込めた幻の北海道の鉄道事情に思いを馳せて読むと楽しさ倍増。読み返すたびにいろいろな場面を深読みできます。■『チャン



ネルはそのまま!』(2009-13)は、北海道のテレビ局を舞台にした〈北海道丸出し〉のコメディ。佐々木倫子さんでなければ書けなかった作品です。ひぐまテレビに視聴率で負けているホシテレビに伝説の「バカ枠」で入社した雪丸花子が報道記者、バラエティ番組のレポーターとして、現場でとんでもない行動に出たり失敗するたびに、結果として視聴者をテレビの前に釘づけにし、スクープにつながり…雪丸の否応なく回りを引き込むパワーは他局から「秘密兵器」と呼ばれるほど。●さらに、作品をおもしろくしているのは、雪丸を囲む配役陣のキャラクター。社長以下、現実離れしながらもこういう同僚やスタッフがいたら番組がおもしろくなるかも…と思わせる人たちばかり。●第6巻最終話は、盛り上げ、泣かせ、感動させ、そして笑わせる4拍子が揃う豪華さ。最終話で雪丸が上司を説得する「こっちのほうが絶対おもしろいです!おもしろそうっていう理由以外に、なにが必要なんですか?」という単純ながら胸に響く言葉がこの作品の源泉。●北海道を前面に出し、お茶の間に直結するテレビを題材に、極上のエンターテイメントに仕上げた佐々木倫子さんのすごさをご堪能あれ。